A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

正宗白鳥

日本の文学

11

正宗白鳥

中央公論社

日本の文学　11　©1968

正宗白鳥

昭和43年2月24日初版印刷
昭和43年3月5日初版発行　価390円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

塵埃 5
何処へ 13
微光 64
牛部屋の臭い 106
人を殺したが……136
光秀と紹巴 239
髑髏と酒場 256
変る世の中 270
今年の秋 277

リー兄さん　287
内村鑑三　295
自然主義盛衰史　362
白鳥随想録　472
注解　500
解説　伊藤整　514
年譜　527
口絵　石井鶴三「微光」
挿画　石井鶴三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

正宗白鳥

塵埃

「原稿出切り」と二面の編輯者は叫んで、両手を伸ばし息を吐き、やがてゆらりゆらりと、ストーブの側へ寄った。炎々たる火焔の悪どく暑くるしいストーブを煙草の煙で取り捲いて、破れ椅子に坐しているもの、外套のまま立っているもの、議会の問題や情夫殺しの消息、明日の雑報の註釈説明批評で賑わっている。

「築島君、その女は美人かね」編輯の岸上が一座の中へ割り込んで問いを発した。

「実際いい女ですよ、青ざめて沈んでるところは可憐です。僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるものよろしく刑一等を減ずべしだ」三面の外勤築島は、煤けた顔に愛嬌笑いをして表情的に云う。

「そんなのろい男は、殺されたくても、女の方で御免蒙むるさ」

「まず何であろうと、僕は天命を保って、充分に面白い日を送りたい。いくら色男になっても、出刃庖丁でずばりとやられちゃ駄目だからね」硬派の大沢が立ちかかった。

「安心したまえ、見渡したところ、一座中そんな心配のありそうな人はないから。まあお互いに銀座のほこりを毎日吸って、ほこりの中の黴菌に生血が吸われっちまうまで生きてるんさ。つまり天寿を保つ者は済し崩しに枯れて行くんだよ。しかしね、稚い木が嵐に折られてるのを見ると、多少風情があるが、虫に喰われた枯木を見ると浅ましくなる。世間にはこんな枯木的人間が到るところにあるじゃないか」

「岸上流の哲学か」と大沢は時計を見て、縁の剝げた山高を被り、「どりゃ枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行こうか」と、戸口へ行った。

「枯木でも風が当りゃ鳴るんだ、大枝なんか、つまり悲鳴を揚げてるんさ」

一座はそれぞれ自分の席へ帰って、編輯局はしばらく静かになった。予は北側の机で、窓硝子の壊れから吹き込む鋭い風に、背筋を揉まれながら、小野道吉君と差し向いで、校正に従事して、局外から編輯の光景を窺っている。南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取りかかるまでの糊口のためにと、ある人の周旋でこの社の校正掛となったのだが、いつの間にやら、もう三カ月になった。こんなくだらない仕事を男子が勤めていて

たまるものかと思いながら、詮方なさの一日逃れで、撼天動地の抱負を胸裏に潜め、鉄唖鈴で鍛えた手に禿筆を握って、死灰の文字をほじくっているのだ。で、校正刷の堆積がひとまず片づくと、予は机に肱を突いて、外ながら外交記者の壮語たくさんの太平楽に耳を傾け、あの人たちは、毎日内閣や議会に出入し、天下の名士と席を同じゅうして語り、酒汲みかわして懇談する身でありながら、なぜ立身栄達の道を開かず、ストーブで炙った食パンを喰って、鬢髪いたずらに白線を加うるに至ったのであろう。明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であって、今こそ破れ布子で髪蓬々としているが、明年を思い明後年を考えれば、想像の糸は己れを中心に、幾百の豊かなる絵画や小説を織り出す。艶麗な景も浮べば、勇壮な潮も湧く。今二三日で四十歳になる、五十歳になると云いながら、腰弁の身を哀れとも感ぜず、無駄話しに笑い興じているあの人々の気が知れぬ。予はもしも四十幾歳まで、この籐椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦巻く編輯局の塵埃を吸わねばならぬと、天命の定まっているとすれば、未練はない。今日ここで舌を噛んで死んで見せる。食パンの味わいは一度でたくさんだ、三百六十五日昼の弁当にして味わう必要はあるまい。自分の一生が食パンだとすれば、二三年経験すれば足っている、何も五十までも六十までも食パン生涯を続けるにも及ぶまい。

かく思いながら小野君を見ると、小野君は雁首のへこんだ真鍮の煙管で臭い煙草を吸いながら、社内の騒ぎの耳に入らぬように、ぼんやり窓を眺めている。まだしみじみ話もせぬが、頭が胡麻塩になるまで三十幾年この社に勤労しているので、この社創立以来社で育ち社で老いた三人の一人であるそうだ。

「どうです、小野さん、今夜はかねての約束を実行して、どこかで、一杯やろうじゃありませんか」と、予は小声で云った。今日は月給日なれば、どうせ一杯やらずにはいられぬので、一人よりは二人の方が興が多いから、仲間に引き込もうとした。小野君はにやりにやり笑って、しばらく考えていたが、「そうですねえ、一度だけおつき合いしましょうか、どこか安直なところで」と、ようやく同意らしい返事をする。

やがて編輯員は一人減り二人減り、六時になると、夜勤の津崎が懐手で、のそりのそりと入って来て、肥満な呑気な顔を電気の光にさらし、けたたましく嘘をして、「畜生、風を引きそうだぞ」と云いながら、袂から瓶詰を出して、「今夜は一人で忘年会だ、給仕、鰯でも買って来てくれ」

「また電報を間違えて睨まれんようにしたまえ」と、岸上は帰り支度で二版の大刷を見ながら云った。

「なあに、勤めるところはきっと勤めるさ。これでもね、雪が降ろうが、風が吹こうが、子の刻までは関所を預かって、勤労無二の僕だからこそ、忝けなくも年末賞与大枚十円を頂戴したんじゃないか、なすべきものは忠義だね」と笑いながら云ったが、急に悄気て、「しかしね、岸上君、今年は僕もつくづく歳晩の感を起したよ」

「そうか、君の感慨なら、まず冷酒の飲むべからざる所以か、前借の慎むべき所以ぐらいだろう」

「いや、僕は真面目に感じたのだ。もう夜勤も二年だが、得たところは、体量が一貫目ばかり衰えて近眼が数度を加えたくらいだ。実は今日昼寝から起きて考えたね、十両の恩賜は有難いが、今歳になって、風邪に罹ること七度、下痢をすること三度だよ、何のことはない、肉を殺ぎ血を絞った結果だと思えば、あのわずかな金に恨みがある」

「でも君は肥ってるから、自分で自分の身を食っても食いでがすらあ、ははは」岸上は靴の音高く階子段を駈け下った。津崎は今日は珍らしく、不平を並べたい風で、校正の席へ来て、皺くちゃの大刷をのばし、目を顰めて点検せる小野君の側に立ち、

「小野さん、もう四五日しかありませんね」

「そうですね、また一つ歳を取りますよ」

「小野さんは月日を超脱してるから羨ましい、僕も去年までは自分の歳を忘れていたんだが、この暮は妙に気になる」

津崎という男、常に給仕を相手に、シャツ一枚になって相撲を取り、あるいは冷酒を呷って都々一を唄ったりするので、社中第一の気楽者と思っていたのに、今夜は魔がさしたように哀れっぽいことを云うのを、予は不思議がっていた。

「なあに、歳を取るのが気になる間が結構でさあ」

小野君は気のない調子であったが、役目を済ますと、予を促して、早速社を退いて銀座の賑やかな通りへ出た。星は氷のように燦いて、風はなくとも、皮膚の隙間に触れる空気は針のようだが、街上は暮の忙しさを集めて活気に満ちている。で、小野君が垢染みた襟巻に首を埋めて、元気なくしょんぼりと立っているのは、いかにも見すぼらしく、場所違いの気味がする。予は福神漬を買って、「どこへ行こう」と聞いたが、小野君はしきりに「安直のところ」を繰り返すのみである。予は京橋附近で飲み食いしたことはないので、牛屋へでもちょっと気臆れがして入りかねる。いっそお馴染みの本郷にしようと、電車に乗った。予は菊坂の豆腐屋の二階を借りて自炊して、電車で通っているが、小野君は小石川諏訪町から徒歩で京橋へ行くので、嵐か大雪ででもなければ、かつてこの文明の恩沢に浴したことはないのである。

本郷三丁目の停留場から一丁ばかりして、色の褪せた紺暖簾に「蛇の目鮨」と白く染め出した家がある。狭くはあり、奇麗でもないが、予が自炊の面倒な時に駆け込む、筋向いの縄暖簾に比べれば、畳に座るだけでも勝っている。ことにここのみは、滅多に学生の犯さないのが有難い。本郷一面西洋料理といい、ビヤホールといい、大学や高等学校の学生が、月末に郵便局から引き出した金で、贅をやるところのみだが、ここは暖簾の汚れてるお蔭か、お客は大抵予らと同類で、塵埃の中から捜し出した金を使うのだ。

予は火鉢を真中に、小野君と差し向いで座って、独断で、かき卵、ヌタ、甘煮などを命じた。小野君は乾からびた手の甲を火鉢の上でこすっているが、食パン生涯の結果か、顔に汁気がなく、目はどんよりして、どこを見ているのか分らない。

「僕にはまだ分りませんが、新聞の仕事も思ったほどいいものでもありませんね」と、予は黙っているのも気が詰まるから、強いて話の緒を開いた。

「そうですとも、何をやってもねえ」と、小野君も言いわけだけの返事をして、気乗りがしない。また二人は黙っている。外は俥のかけ声、下駄の音、威勢よく叫ぶ声、非常の騒ぎであるが、小野君は社にいると同じく、四面の騒ぎは耳に入らぬようで、煙草すら吸わない。神経はなくなったのであろうか、感覚は消滅したのであろうか。これではパンとビフテキと、酒と茶との区別もないんであろう、二十年も座らされたきり、一つところにじっとしているのも無理はない。生まれて以来、蓆は厭だ、絹蒲団に座りたいと、かりそめにも思ったことはないと見える。

「でもあなたはよく長く社に辛抱していますね」

「へへへへへ、まあ仕方がありませんのさ」

女中が霜脹れの手で、膳を突きつけるように並べて、銚子からは湯気が立っている。予が満々とついだのを、小野君は一口に呑み干したが、さすがにこれにまで無神経ではないと見え、急に人相が変って来る。二杯三杯と、予もいい気持になったが、小野君は木彫りの像に魂の入ったように筋肉がゆるやかに動き出した。

「あなたは随分いけるようですね」

「まあ好きな方ですよ、やっぱり酒という奴あ味いもんだ」と、余瀝を舐めて、畳の上に置いた杯を眺め、背を丸くしてぐったりしている。

「そりゃ結構だ、私なぞは酒がそんなに味いっていうわけじゃないんだが、独り身で、ほかに楽しみもないから、仕方なしに呑むんです」

「しかし仕方なしにでも呑める方が、呑みたくても呑めんよりは結構でさあ、ははは、いや全くあなたの境遇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

が羨ましい」
「僕が羨ましいって云うんですか」
「私は悪い癖があってね、酒を呑むと、若い人が羨ましくなったり、自分の身が哀れっぽくなってしようがないんですよ。平生は何の気なしに聞いたり見たりしたことが、急にむらむらと思い出されるんでしてな」
「そうですか、じゃ一つその思い出したところを承りたいもんだ」
予はこの木像が何を思っているかと、一方ならず面白くなって、やたらにお酌をした。
「なあに私たちの思っていることはね、皆なくだらないことでさあ。よく原稿にある文句だが、碌々として老いるっていうのはまず私たちのことでしょう、一体碌々という文字は、先生方はどんな意味で遣ってるんか知りませんがね、私は『碌々』の中には、いろんなつらい思いが打ち込まれてるんだと独り定めにしてるんです。碌々として老いるって、決して呑気にぼんやりして老いるんじゃない」と、ぐったりと垂れてる首を振ったが、急に反身になって、「はははははは、まあ人間は若い間若い間、さ、差し上げましょう」と、声も艶を持って、今までの小野君の喉から出たとは思えない。
「あなたは馬鹿に長くお勤めなすったんだから、新聞生活はよく御存じでしょう、これで精勤すれば有望なものですかね」
「さあ、それですよ、全体世の中に職務を忠実に尽してりゃ、それで自然に立身するっていうことはあるんですかね」
「むろんあるでしょう、またそうなくちゃならんわけだ。僕はまだ世間の経験に乏しいけれど、よく雑誌なんかの成功談に出てるじゃありませんか」
「ははは、雑誌や新聞に虚言がないものならばねえ、いや活字の誤植よりゃ、書く人が腹の中の誤植を正す方がいいんさ」
「何しろ校正係は張合いのない仕事だ、僕も早くどうかしなくちゃ」
「さ、私も昔はたびたびそう思いましたがね、思ってる間に、ずんずん月日は立ってしまう。しかしまだどうかしようと思ってる間は頼もしいが、私たちはどうかなるだろうで日を送るんですよ」
「だが、その方が気楽でいいかも知れん」
「まあね、初めの間は波の中でばちゃばちゃやってまさあ、それが次第に大きな波が幾度も幾度も押っかぶせて来りゃ、どうせ叶わないから勝手にしろと、流され放題に目を瞑るようになります。社でも、随分波が立ったんですが、私たちのように抜手の切れない者は、そのたびごとにぎょっとして、手足が萎けてしまう。萎けたあげ

くが碌々として老いるんですよ」
窪んだ目縁がほんのりと紅くなって、眠っていた目も燦く。
それからしばらくは無言で、肴をつつき杯を干していた。紺暖簾が寒い風にゆらめいては、隙間から人影が絶えずちらつく。室内には自分らのほかに、片隅に外套を着て鳥打帽を被ったまま、風呂敷包みを側に置いて、忙しそうに飯を食ってる男があったが、箸を置くと、すぐに勘定を済ませて、目をぎょろつかせ、あたふたと出て行った。
予は勢いのよい血汐が全身に漲ぎって圧えきれぬようで、ところもかまわず、「王郎酒酣」を歌う。小野君はくずれかかった膝に両手をくの字なりについて、謡曲を低い声で謡う。節まわしが玄人ぶってる。
「あなたは謡曲を稽古したんですか」と、予は驚いた。
「四五年前にちょっとやったことがありますよ」
「綽々として余裕ありですね、あなたにそんな風流の嗜みがあろうとは予想外だ」
「なあに風流だなんて、そんな気楽な量見で始めたんじゃないんですよ。私にゃね、津崎君のように、大びらで不平を言う元気はなし、そうかって、ほかの人のいやなことは自分にもいやだし、どうかして鬱憤を晴らして、苦労を忘れようと思ってね、会計の竹山君の後へくっついて、素人謡曲の組へ入ったんですよ、長屋で謡曲なんて、佐野常世の成れの果てか、ちょっと洒落てまさあね。はははは」
「じゃあお能も見においでしょうね」
「どう致して、お能拝見どころの騒ぎですか、まあ聞いて下さい」と、小野君は居住いを直して、「素人組の連中は、今月は梅若、来月は宝生と、見て廻っていろんな批評があります。私はそんな真似は出来ないから、まあ『能楽』っていう雑誌を社から貰って、それを読むのがせめてもの慰めだったんでさあ。ところがその雑誌さえ社に没収されることになって、私の手には落ちぬようになったんです。それが社の規則だから仕方がない、社の方じゃ屑屋へ売っても、一銭か二銭だろうが、私にとっちゃ、大変な楽しみで、月々心待ちにしたんですがね。朝に一城を奪われ、夕に一国を奪わる、拙い譬えだが、弱い者はますます権力を剝がれてしまうんだ。そこで私あ、すっかり断念しました、謡曲も止めて、夕食でも済むと茶でも呑んで、ころりと横になって、天井の蜘蛛の巣でも見てるんです」
平生表情の欠けてる小野君の顔も、憂色を帯びて来る。
「だって雑誌一冊くらい、わけを云えばくれんこともないでしょう」
「いや、それを主張するだけの元気があればいいんです

がね。いつかも、物価は高くなる、子供は殖える、困りきったあげく、五重の塔から飛び下りる気になって増給を願い出たんです。すると、今ので不服ならお止めになっても差し支えはないと厳命が下るんです、まるで雷に打たれた気でさあ。つまり私のような無能な者は、社でも必要でなければ、世間にだって不用な者だ。生きてられるだけが有難いお慈悲だと思い返してるんですよ」

へへへへへと凄く笑って、「や、こうしちゃいられない。子供に春着の一枚も造ってやらないで、親爺が酒なんか飲んでもいられまい、さ、帰りましょう」と、よろよろと立ちかかった。

予は勘定を引き受けて、外へ出た。小野君は「済みませんなあ」と数千度もいって、予に分れてとぼとぼと小石川の方へ行く。予はしばらくその後姿を見送ったが、小野君は荷車にぶっつかって、しきりに詫びをしていた。

その翌日、出社すると、小野君は元の石地蔵で、どこを風が吹いてるかと、冷然としている。築島や大沢は相変らず、パンを噛って気焔を吐いている。予もまた一日を校正に過さねばならぬ。己れには将来があると、心で慰めながら。

何処へ

一

可愛い目元をほんのり酒に染めた女が高くさしかけた傘の下に入って、菅沼健次は敷石伝いに門口へ来た。

「じゃ明後日、きっとですよ」と、女中は笑顔で覗き込み、艶気を含んだ低い声で云った。

「むむん」と健次は女の顔をも見ず、引ったくるように傘を取って、さっさと急ぎ足で歩き出したが、五六間も歩んで我知らず振り返ると、「鳥」と行書で書いた湿った軒燈の下に、かの女がぼんやり立っている。

健次は何のわけもなく微笑する。女も微笑して、胸を突き出して会釈する。

それも一瞬間で、健次は傘を肩にかけ、側目も振らず上野の広小路へ出て、道を山下の方へ取る。

昨日の天長節に降り通した雨は、今日も一日絶え間なく、湿っぽい夜風が冷たく顔に吹き当る。往来の人々は皆傘を斜めに膝を曲げて、ちょこちょこと小股に急いでいる。健次も膝から下はびしょ濡れになったが、あえてそれを気に留めるでもなく、ただいい気持で、口の内で小唄か何か呟いて、沈んだ空へ酒臭い息を吐きながら、根岸の近くまで来ると、横合いから底の深い大きな蝙蝠傘が、不意に健次の蛇の目にぶっつかる。チェッと舌打ちして避けようとする機会に、蝙蝠傘の男が声をかけて、

「やあ君」と立ち留まった。

健次は少し驚いて、

「やあ君か、どこへ行った」

「君の家さ、今夜は雨だから、きっといるだろうと思ったのに、どこを浮かれてた。いい顔つきをしてるじゃないか」

「そりゃ気の毒だったね、これから僕の家へ行こうじゃないか」

「いや、もう遅いからよそう」と、蝙蝠傘の男は長い身体を屈めて、下駄屋の時計をのぞいて見て、「もうかれこれ九時だね」とちょっと考え、「実は君に少しお頼みがあるんだが……ここで話してもいいが、どうだそこらの珈琲店へでも寄ってくれんか」と、首をまわして周囲を捜す。

「じゃ、そうしよう、この先にいい家がある」と、健

次は先きに立って、半町ばかり泥濘の中を通って、擦玻璃に一品亭とある小さい西洋料理店へ行った。
客は一人もいない。白布で蔽うたテーブルの上に火鉢を置いて、籐椅子が四五脚周囲に不秩序に置かれてある。健次は火鉢の火を掻き廻して、
「君は馬鹿に寒そうじゃないか、さあ当り給え」
と云って、巻煙草に火をつけて、反身で椅子に寄っかかり、しきりに瞬きをしながら仰向いて煙草を吸う。
今まで板の間に腰掛け、左右の袖を掻き合わせて居眠りをしていた小娘が、高い足駄を引き摺って、
「お誂えは」と寝呆声で聞く。
「寒いから日本酒がいいだろう、料理は何がいい、ビフテキにでもするか」と、骨太い手を火鉢の上に翳しぼんとしている相手の顔を見て、黙諾を得て、健次は小娘に命じた。
この丈高き男は織田常吉と云い、健次が昔の同窓の友で、今は私立学校に英語の教師を勤め、傍ら翻訳などをしている。年齢は健次よりわずか一つ上だが、健次の小柄で若く見えるのに反して、格段に老けて見える。丈の高きのみならず、それに釣り合うほどに肉づきもよく、見たところ魁偉なる人物であるが、どことなく身体にゆるみがある。塩気が足らぬ。顔は平たく目は細く、耳は福々と垂れている。
「君は相変らず気楽そうだね、ことに今日は愉快な顔をしてるじゃないか」と、織田は健次を見て、ゆったりした声で云う。
「ははは、そう見えるかな、これで二三日打続けだよ。まあ社の方が暇つぶしで、遊ぶ方が本職のようなものだ、しかし本職となると、遊ぶ方法に苦心する。いかにして遊ぶべきかが、僕の当面の問題である」と、陽気な声で、ちょっと桂田博士の仮声を使い、顔に愛嬌を湛えて微笑する。
「まあ遊べる間は遊ぶがいいやね、しかし今もね、君の母堂と話して来たんだが、健次もこのごろは酒好きになって困ると云ってたよ。祖父さんのようにならなきゃいいがと云っていられた」
「そうか、僕の母方の祖父は大酒呑みで、終いには狂人になって死んだんだからね。それに僕の顔が次第に祖父に似て来るそうだから、母は心配してるだろう」
「何、そうでもないらしい、ただ早く嫁を貰いたいような話をしていた、僕にもいいのを見つけてくれって、本気で云ってられたよ、親は有難いものだね」
「そうかね」と、健次は嘲けるように云って、「君も精精美人をさがしてくれたまえな」
「そんな気があるんなら周旋しよう、しかし何だよ」と云いかけたところへ、小娘が銚子を持って来ると、織田

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo